

優先性一元論とジョサイア・ロイス

雪本泰司(Yukimoto Taishi)

大阪大学

基礎的な具体的対象の数はひとつであるという優先性一元論(以下、一元論)をシャプファーが定式化し擁護して以来、一元論をめぐる議論は盛んに行われるようになった。基礎的な具体的対象とは、どんな具体的対象にも依存しないしかたで存在する具体的対象のことである。基礎的な具体的対象の数に関して、(基礎的な具体的対象が存在すると仮定すれば一元論の否定である)多元論以外の選択肢がまともに検討されたことは、シャプファー以前にはほとんどなかったと言えるだろう。

たとえば、メレオロジーにおける特殊合成問題では、それ以上部分を持たないメレオロジー的な原子から、なんらかの対象が合成されるかどうかの問題とされてきた。原子に依存するしかたで存在するならば基礎的ではない。原子がどんな具体的対象にも依存せずに存在するならば基礎的である。基礎的でない対象が実在するかどうかによって特殊合成問題への答えは分かれるが、いずれにせよ原子が基礎的であるという前提は共有されていた。基礎的な具体的対象が原子だとすれば、この世界でその数はひとつより多いので、一元論の主張は否定されることになる。一元論は、基礎的な具体的対象の数はひとつであるという主張だからである。

シャプファーは一元論を擁護する多くの異なる論証を提出している。その中のひとつに、20 世紀初頭の新ヘーゲル主義者たちが提出していたとされる論証を再構成したものがある。論証は二つの部分からなる。第一に、すべてものは内的に関係している。第二に、すべてのもものが内的に関係しているならば、一元論が帰結する。前者を正当化するためにシャプファーは、因果的本質主義、supersubstantivalism、対応者理論それぞれ前提したときの関係の例として、因果関係、時空関係、世界メイト関係を挙げる。また、後者を正当化するために証明を試みている。

これに対して、ジーマーマンは、20 世紀のイギリスやアメリカの観念論者たちが用いた依存の概念をシャプファーは正確に再定式化できておらず、正確に定式化した場合にはシャプファーの論証は成功しないと反論している。彼はシャプファーが引いている観念論者たちの中でもジョサイア・ロイスが最もシャプファーの立場に近いとして、もっぱらこの両者の比較に集中している。

本発表では、ジーマーマンの反論に再反論を行う。